（電報局電話）

時事新報

第千四百十三號　金曜日

明治十九年十月廿二日
舊丙戌九月廿五日　（乙卯）

日出午前六時十三分　日入午後五時十五分
月出午前零時零九分　月入午後二時零一分
滿潮午前十一時五十分　干潮午後

（西暦一千八百八十六年）

（毎日曜日休刊）　（定價金二錢）

時事報報

整理公債の募集より進ふて金穴の去就如何

何れの國にても通貨なるものは商賣の媒介として金力ある人が其資本を工商の事業に卸して爲に殖産の繁昌も望む可きあれども其金滿家が商賣社會を顧みずして公債證書なぞを買入るゝときは恰も資本を殺さたるの姿にして國の金穴い有れ共なきに等しきのゑ例へば銀行は商工の金融を助る爲めのものあるに近來日本の諸銀行は金を活用するの道なきゑ苦しまして公債證書を買入れ其利子を政府より請取りて株主ゑ配當するが如く其事實として見る可し銀行にして銀行の用を爲さゞるものあり然るに不幸にして我日本國は四五年以來商況不景氣、國中の資本家は其資本金を用るゝ場所なく偶まそを借用せんとする者あるも甚ぞ不安心ゑして貸す可らず是に於てか公債證書の買入れに心を專ゑまて相互の競爭その價格をせり上ゑ遂に今日の頂上に達したるは商賣上の不吉不祥これよりも大あるはなし資本家が斯くまでに低利に安んずるゑ其資本が以前に倍して國の豐あるが爲めにハ非ず唯商賣社會の信用薄くゝを手放す可らずして手元ゑ溢るゝが故に止むを得ず自から不利に觀念するのみ左れば此富豪者が公債證書を買入るゝは事實餘義あき次第にして國れ殖産の利害如何は之を顧るに遑あらず其本人の身に利益とあれば之を恕す可しと雖も我輩の見る所と以てもれば本人の私の爲めを考へても之を利益と云ふ可ふざるゞ如き資本家は四五年の不景氣の爲めに非常の損亡を蒙り仮令へ其元金の數を減するとなきも從前は元金百ゑ付き十乃至十二の利を得たるものが今は貸金に又公債證書ゑ所得の利は前年の半額に過ぎず卽ち資本の名乞前の如く百にして實の働をば半減したる其態は一時十節の汽船と五節の汽船と交易しさるに異なゝず即ち家の資産を半減しさるものなり誠に氣れ毒ある次第なぞとも世上一般の景論あるは暫く之に堪へ忍び少ゑく商況回復れ端ぞ見たらば資本の働も舊ゑ復し資産半減の夢も醒たて名實共ゑ十分と爲り始たて大ゑ運動して不景氣數年間の創痍を癒さんとするは正に今の商人の心緒なる可きぞ愛に此度び整理公債證書の發行に逢ふたり商人等は此時に當りて如何の謀と爲すや政府は正當の約束に從ひ六分以上の公債を償還するものあれば人民に於て一言の苦情ある可らず扨その償還金を受取りて工業商賣に活用と試るか餘に目出度兒事にして國の殖産れ爲めに賀す可きは勿論本人の爲めに謀りても久しく資本と遊ばせて公債あるゑは低利を働きたるもれと今度の機會に公債より引離して商賣に用るは恰も資本金の本望とも云ふ可き次第にて必ず勝利ある可しと思へとも又一方より浮世の有樣を考ふれぞ人の心い薄兒ものにして一度び驕病神にとりつかれたる上い際限もなく物事を忘るゝの常あるが故に彼の商賣工業に態々して公債證書と拜み奉りたる拜公債宗の故老輩は利益れ厚薄を顧るゑ遑あらず、かりそめにも公債とあれば五分利も七分利も差別あく身代と奉ゑて公債證書の上に閑座し子孫綿々智恵と問はず千代萬世の末ゑでも國庫に築りさる國民の租稅金に衣食せんと欲する者あきと期す可らず甚だ妙案なるに似たれとも拜公債宗の信者がいよゝ〳〵斯くと安心決定したるものあらば我輩は聊か此信者に向て問答と試ゑざると得ず抑も信者は公債に信心發起の其時より今日ゑ至るまでゆめ〳〵失望したるゑとはなゝや試に見よ光明赫灼たる金穴公債證書の表面ゑは

此證書ノ利息ハ明治十年ヨリ始メ明治三十九年マデ年七分ノ割合ヲ以テ條例ノ如ク年々兩度ニ通貨ニテ拂ヒ渡スベシ此證書ノ元金ハ明治十五年ヨリ明治三十九年マデ二十五箇年ノ間毎年大藏省ノ都合ヲ以テ抽籤ノ方法ヲ用ヒ拂ヒ渡スベシ云々

と有り信者は數年前百圓の額面を七八十圓にて買ひ爾後其相場の次第に騰貴して是れは意外の利益なりと思ひしことゝもあらん或は騰貴れ頂上百十圓以上の時に買入れ不圖下落して是ゑは思はざるの損毛ありと失望したるともあらん但ゑ是等は得意失望の些細あるものあれども今度整理公債の一發には甚だしき震動を催したることあらん百圓の正價を以て六分利以上のものと引上げらるれば是れまで市中賣買の相場百何圓を以て買ふたる其何圓丈けは全損ゑして訴る所ある可ふず誠ゑ氣の毒あるゑ信者の次第なり尙ほこれより氣の毒あるゑ信者が證書を所有して毎年抽籤の運不運はあるも明治三十九年まで今より二十年の間ゑ平均すれば不運は二十分の一ゑして所有二萬圓の中一萬九千圓丈けは必ず七分利息と働く者あり乞一向一心に信たる其甲斐もなく七分の利息は別を告ゆて目者る五分利の證書が百圓とあれば差引二分の利益は夢まぼろゑの如く消へて痕あきものあり夫れのみあらず信者が是れまで諸種の公債證書と買ふには智恵のあらん限りを盡し金穴い云々起業は云々我ゑは金札引替とせん否な中山道ゑ若か定なと再三十餘盤を彈き再四相談と遂ゑ水も漏らさぬ勘定にて最上のものを擇び又擇ばんとする其心配の最中に整理の一發平等一切六分以上は都て償還と定まりて義ゑ智恵と振ふさるころ愚あゑ、心配しさるゑそ無益あれ、金の損亡は扨置き精神の徒勞といふ可きものあり尙ほ夫れのみあらず抑も今度政府より整理公債を募集まて六分利以上は公債を片付るは世間の金滿家ゑ商賣には手を出さずゑく坐食の方に目を配り外に低利を厭はず内に儉約を主とゑ穢く長く家を保さんとして遂ゑ六分以上の公債と百何圓にまでせり上ゑ實際ろの資本金は五分利以下ゑも安んずる情實の現いれけゑと政府に於ても之に注目せざるを得ず民間の金利は五分以下に下りあがら政府が獨り六七分の利息を拂ふは不相當あり、國民の納る租稅金を以て金滿家の坐食ゑ奉するは謂れなゑとの主義ゑ出たるゑとゑふん如何ゑも德義上に愧ぢざる處分あれば我輩は金滿家の私の爲めゑ謀りて其失望の次第甚ぞ氣の毒には思れども今日の處にて之と如何ともす可らざるのゑか今後とても決まて安心と云ふ可らず其次第は目下民間の金利が凡そ五分にまて公債證書の價格も凡そ其割合ゑ居ればこそ政府が六分利以上は公債を整理償還すれ共今より後、世間の商況い引續いて衰弱の色を現はし資本家いまゝ〳〵商賣と恐れてまず〳〵坐食を謀り、まず〳〵公債證書を買込んでまず〳〵其價とせり上少民間金利の平均は三四分ゑ迄も下りて五分利の公債證書が百何十圓ゑ上るとゝもあらんゑは其時には政府は更に三四分利の整理公債と募集して從前發行五分利以上のものを償還すゝ可きは必然の數あり如何とあれば世間の金利は三四分に下りあがら政府ゑ獨り國民の租稅金を以て高利を拂ふは德義上に不都合ありて言ふ者ありて其言ゑ尤に聞ゆ可けれとなり若し萬一も斯る場合に至るときは彼の拜公債宗の信者は曾て百と思ひゑ其資本金を以て僅に三四十の働と爲さゑめ百の虛器を擁して六七十の實と損する者と云ふ可ゑ誠に憐む可き次第ゑゑそれ然りと雖ども更に眼界を廣くして天下の大勢と察すれば今の文明の商賣社會には天保時代の素町人と容る可き餘地を遺さず何れの道にしても其運命の長からざるは疑もなき其中ゑ今度の整理公債募集の如き之を利用すれば必ず勝利ある可きなれども若しも然らざるに於ては富豪者の自業自得唯だ自から衰勢を促ゞすに足る可ゑのみ

官報

○大藏省令第三十一號

賣藥自用者ニ於テ無印紙ノ賣藥ヲ買受ケ讓受ケ預置キ又ハ所持スルヲ得ス犯ス者ハ金一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

明治十九年十月廿一日　大藏大臣伯爵松方正義

○內務省告示第二十七號

左ノ地方ハ虎列刺病流行地ヲ解除ス

長野縣、島根縣下出雲國石見國、高知縣、福岡縣

明治十九年十月廿一日　內務大臣伯爵山縣有朋

○大藏省告示第九十六號

五分利子金穴公債元金一萬圓　六分利子金穴公債元金二萬圓

右金額十九年度歲計豫算ニ據リ償還ノ爲メ來ル十一月中抽籤執行ス

明治十九年十月廿一日　大藏大臣伯爵松方正義

○警察令第十九號

本年八月警察令第十七號ヲ以テ祭禮ニ山車踊屋臺等ヲ曳出スヲ禁セシ處虎列刺病衰退ニ付禁ヲ解ク

明治十九年十月二十一日　警視總監　三島通庸

東京府知事高崎五六

○東京府令第四十號

本所區亀戸町五十八番地面積七千四百十九坪ヲ南葛飾郡柳島村ニ編入ス

明治十九年十月二十一日　東京府知事高崎五六

（以上本年十月廿一日官報）

雜報

○大坂貧民家屋取拂の件　去る十七日大坂發の報知に曰く本日電信まて報道せし如く當大坂四區及接近二郡の聯合會は昨日午後二時より府會議事堂に於て開會し彼有名なる貧民家屋取拂の事と議せしが當日出席議員二十二名よゝ先づ會議費百六十圓四十錢の項ゑ付第一次會と開きたるに皆原案ゑ決し續て土木費則ち共同家屋建築修繕費四萬七千九百廿三圓五錢九厘の費目を議せるゑ當り十番議員豊田文三郎氏起て曰く今日如此原案を發し共同家屋を建築して貧民と移轉せしむるも到底今の大坂四區及び接近郡村は此儘にて永久保持す可きものにあらざれば早晩大に市區の改正と行いさる可らず左れば今ゑ於て多額の金員と費して僅に一小部分を改正するも左迄の効能ゑあゝざるべし殊ゑ昨年以來府民は水害れ爲に避く可ゝざるの土木費を負擔せり斯る民力凋衰の時に臨んで不急の土木を起すは到底民力の得て堪ふべき所ゑ非ざれば到底原案を採用す可らずと主張しければ忽ち七番議岡德太郎氏五番門田利助氏外二三名は贊成して當大坂制等の設けあり此議案を發して事ろ該規則に憑ゑゑ命まて取拂はを行はゑむ可しれ原案と贊成すゝ採るに及び滿場たり樂く共有物開化たりしも六最早本案は議す第二次會を開きゑて確定し同費賦課して支出す散會したり元來は當局官吏の頗ゑ於て全廟とゑゑ議員を改撰し候全廟せられたるべし

○天津陶器貿易を顧はゑさる中由抑も此地の貿の問定期航海はらんも其重あるゑ生ゑたるに依れる陶器は從來廣よりも餘程安直於て發達するこゑ共に陶器の價格を比較すれば我地の需要向きゑ有のゑれば斯くも肥前の有田燒、向て輸出ゑたるゑべゑといふ左ゑ互に競爭を以て有樣となりさる之

○東京の流行（はい形などを總稱ゑ）いり下町より山いり名にしゑふ吾妻て大方は家稼と出に伴はれて共同有樣あるりしが明あゑ茲に三嶋書布しより道路泥濘袋ゑ泥の砌點を爲る事前りもあゑ内ゑ徘徊して雖れ吾妻下駄」と寄のしけれ但し麻裏草近來餘り見掛け の兩歯は高さ一寸畳は幅廣の黑塗ゑ太さ四分、是を履と聞けり替つて黑後前を七分引込めたる流行う穿く